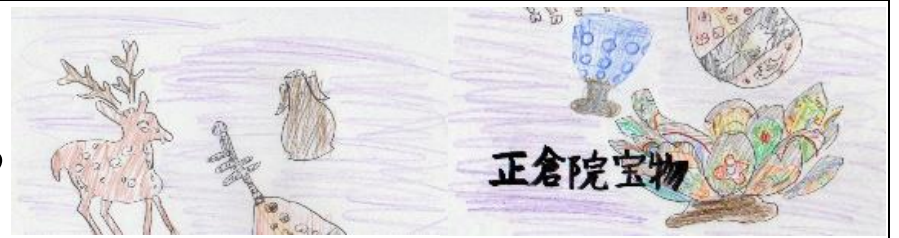


仏女新聞

号外！

正倉院宝物に迫る

ISSN 2187-7629



正倉院宝物とは？

およそ1300年前、奈良に都があった。正倉院の宝物は、当時の帝だった聖武天皇ゆかりの品が多くおさめられている。天皇を失った光明皇后が大仏にお供えしたのだ。光明皇后は聖武天皇が遺した宝物を見ると、昔を思い出して悲しくなってしまうのでつらいと書き残している。光明皇后は、なくなった天皇や、残された人たちの幸せを願う気持ちをこめて宝物を献上したのだろう。正倉院はその気持ちも今に伝えてくれている。



鳥毛立女屏風

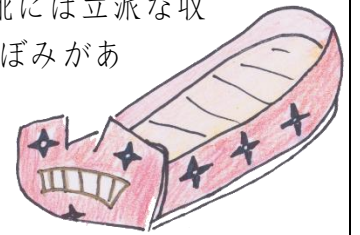
鳥毛立女屏風は、元々ヤマドリの羽が貼られていたそうだが、今は残っていない。描かれている女性は「やわらかい」とか「穏やか」という印象だ。去年の正倉院展に出ていた「鳥毛篆書屏風」もヤマドリの羽で飾られていた。ヤマドリの羽は茶色とクリーム色の縞模様で「野生」を感じさせる。女性の雰囲気とヤマドリの羽の色が合わないのではないかと思いつつ、女性の服をヤマドリの羽の色で描いてみると、「気が強く、堂々としている」というイメージが変わった。服は人の印象を大きく変えるのだ。みなさんも試してみたい。



大仏開眼会では音楽に合わせて仮面をかぶって役を演じる「伎楽」が行われた。酔胡従というのは伎楽の中で酔胡王と共に酒を飲む家来だ。真っ赤になった顔にほのぼのとした表情がかんている。顔がこれほど赤くなるまで酔胡王とお酒を飲んでいたということは、酔胡王は仏教では禁じられたお酒を飲むという行為をしていたが、気前がよくて家来とはものすごく仲がよかったのではないだろうか。お酒も酔胡王がおごってあげたのかも知れない。伎楽の様子が思い浮かぶお面だった。



衲御礼履は大仏開眼会の時に聖武天皇が履いた靴だ。牛革を赤く染めたものと染めないままのものを縫い合わせて作られている。さらに側面には真珠やガラス玉が花の形に並べてある。遠い昔にも「オシャレ」があった証拠だ。しかし、ミシンなどの便利な機械は存在しなかったのでつくるのに手間がかかったと思う。なのにこの靴には立派な収納箱がある。靴がずれないようにするためのくぼみがあるのは傷まないように大切にされていたからだろう。正倉院の宝物達は大切にされていた恩返しに姿を見せてくれているのかもしれない。



伎楽面酔胡従

衲御礼履（のうのごらいり）